

パネルシアターの制作および演習を

保育者養成課程に取り入れる意義と教育効果について

Significance and educational effects of incorporating Panel Theater productions and practices
in nursery teacher training courses

松家 麻記子

Makiko Matsuka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻

キーワード：教育効果，パネルシアター，保育者養成

Key words : Educational effects, Panel Theater, Nursery teacher training courses

1. 目的

パネルシアターは、「起毛性のある布（パネル布）を貼ったパネル板に、ざらつきのある不織布（通称「P ペーパー」）で作った絵を貼ったり外したりしてお話、歌遊び、ゲーム等を展開していく表現方法」として1973年に古宇田により発案された（古宇田ら2009）。「子どもに話す意欲、応答する力が生まれ、演者の一方通行にはならず、子どもとの一体感が高まる場所にパネルシアターの計り知れない魅力がある」と古宇田自身が述べているように、演じ手と観客の相互のコミュニケーションを育む教材として、パネルシアターは活用されていった。それに伴い保育者養成校でも保育技術の一つに取り入れる学校が増えている反面、その教育効果についての実証的研究はほとんどない。そこで本研究では、これまでに筆者が幼稚園教諭、保育者養成校の教員、そして作家として取り組んできた経緯を背景に、保育者養成課程にパネルシアターを取り入れる意義とその教育効果を明らかにすることを目的とする。

その具体として、既存の指標（尺度）を使って学生の学びを検証すると共に、パネルシアターを取り入れている保育者養成校の授業担当者が期待するねらいから抽出した視点をもとに、養成校での授業の実態を分析し、保育者養成校においてパネルシアターに取り組む教育的な価値や影響、すなわち「教育効果」を考察していくものとする。

2. 方法

- (1) パネルシアターに関する先行研究の調査を通して、研究の動向と課題を明らかにし、本研究に活かす視点を抽出する。
- (2) 全国の保育者養成校への悉皆アンケート調査を通して、保育者養成校におけるパネルシアターの認知度と授業の実態（授業への取り入れ方、ねらい、指導方法、期待の実情と課題）を明らかにする。
- (3) パネルシアターの作品制作及び演じ方演習の授業における学生を対象とした実態調査を通して、保育者養成の観点から教育効果の検証を行う。
授業の実態調査は、コミュニケーション尺度と造形表現に対する態度尺度を用いたアンケート調査と学生の振り返りシートを用いた調査を行う。振り返りシートについては、特に、学生一人一人の取り組みのプロセスに着目して分析を行う。
- (4) 上記の結果をもとに、保育者養成課程においてパネルシアターを取り入れる意義を考察し、指導法の在り方を試案する。

3. 結果と考察

先行研究の調査では、内容の整類と分類を通して近年の研究の動向と課題を概観したところ、2000年以降は教材研究の分野が増加していること、保育者養成校における研究では、技法の紹介や実践報告だけでなく教育効果を検証しようとする動きも出てきているものの、科目や指導及び評価方法には一貫性が見られず、教育効果や意義が十分

に実証されていないことが明らかになった。

保育者養成校における調査では、全国の保育者養成校 653 校中 213 校から回答を得（回答率 32.6%）だが、212 校（653 校の 32.4%）がパネルシアターを認知し、161 校（653 校の 24%）が授業に取り入れていることが分かった。また、科目や学年、ねらいは一貫性がみられないものの、「パネルシアターが児童文化財の一つとしての位置づけ、習得すべき技術の一つとして捉えられていること」「児童文化財としての意義が認められていること」が示唆された。加えて、パネルシアターを「教材」として捉え、活用する養成校も一定数あり（161 校中 28 校、17%）、「子どもを意識した学び」や、実習や就職後における「活用のしやすさ」など、保育者養成のカリキュラムに取り入れる価値が期待されていることが伺えた。

授業の実態調査では、「保育内容（造形表現）」を履修する 3 年生 54 名（初等コース男性 1 名女性 10 名、幼児教育コース男性 4 名、女性 39 名）を対象に、造形表現に対する態度尺度とコミュニケーション尺度を使ったアンケート調査（取り組む前、制作後、演じ方演習および発表終了後の 3 回実施）と、振り返りシートによる調査を行った。その結果、54 名中 51 名から回答を得（回答率は 94.4%）、「造形表現に対する態度尺度」における「表現に対する肯定感」と「感受性の強さ」の 2 因子について、主効果が認められ、自由記述に対する回答の集計結果からは、学びのプロセスにおける「子どもを意識した学び」や「パネルシアターならではの応答性」が、学生の学びの実感（教育効果）に影響を与えている可能性が示唆された。また、学生の振り返りシートの集計結果からは、全国保育者養成校への調査で捉えられた授業担当者が期待する教育効果の「子どもを意識した学び」「活用のしやすさ」「実習や就職後に役立つこと」を学生自身も実感していること、学生一人一人の特性や経験の違いに着目した分析からは、子どもとふれあう経験の有無が「子どもを意識した学び」のプロセスに影響を及ぼしている（子どもとふれあう体験をしている学生の方が気づきや課題意識がより明確になる等）可能性が示唆された。学生は、作品の構想やシナリオシートを作成する際、しかけを組み立てる際に、難しさと共に、学びや成長を生み出す「教育効果」を実感していることが伺えた。また、学生が実感しているパネルシア

ターならではの特徴は、(1)取り組みがいがあり、達成感や成果が大きいこと、(2)しかけの面白さ、(3)活用への期待と活用のしやすさであり、子どもを意識した学びと共に、学びの実感に影響していると考えられた。

これらのことから、パネルシアターは、学生にとって、子どもを意識した学びを生み出し、作り演じるプロセスを通して味わえる「取り組みがい」や「達成感」が、学びの実感となって、「表現に対する肯定感」と「感受性の強さ」の主効果へとつながっている可能性が示唆された。そして、パネルシアターの授業における教育効果を高めるためには、(1)子どもとふれあう体験が学びを深めること、(2)子どもを意識した学びを生み出すチャンス＝構想のプロセスを大切に扱うこと、(3)制作から演じ方演習および発表までの一連のプロセスが大事であろうと取りまとめられた。

以上のように、先行研究や全国の保育者養成校への調査結果から得た視点をもとに授業の実態調査を行ったことで、パネルシアターを授業に取り入れた際の授業担当者の期待の実情と学生の学びの実感がある程度一致していることがわかったこと、教育効果として「表現に対する肯定感」と「感受性の強さ」に主効果があること、学びの実感には「子どもを意識した学び」がポイントとなることなどが捉えられたことは、これまで、授業担当者が手探りで行ってきた指導の在り方を意味づけ、その意義を探る一歩になったと言えるだろう。ただし、今回の調査は、あくまで筆者が担当している授業を通しての実践研究にとどまるものであり、また、他の教科との関連や実際に子どもを対象に演じる体験までを追った検証には至らなかった。今後より多くの保育者養成校の実践および追跡調査を行い、検証していく必要がある。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所 令和 2 年度大学院生研究助成 (B) 課題番号 DB2028 「パネルシアターの制作および演習を保育者養成課程に取り入れる意義と教育効果について」を受けて行ったものである。

主要参考文献

[1]古宇田亮順,松家まきこ,藤田佳子「実習に役立つパネルシアターハンドブック」萌文書林, 2009

[2]松家まきこ「教員・保育士志望学生の造形表現
に対する態度測定尺度の作成と態度の分類に関する研究」大学研究年報(教育学部・経営学部)2018